

した紀元一世紀から三世紀の政治史を解説し、三世紀後半に登場してバルミラを栄光と破滅へと導いた、女王ゼノビアの生涯を以って結んでいる。

著者は本書で、東西文明の溶鉱炉としてのバルミラではなく、その影響を受けつつも、奔流に流されることなく独自の世界を形成していった、バルミラ人の姿を描くことに成功している。バルミラの歴史を多方面から研究し、その立体像を鮮明に浮かび上がらせたのが国最初の著書として、本書は高く評価されよう。

(四六判、二八三頁、一九八〇年四月十日、近藤出版社、世界史叢書24、二二〇〇円)

(堀川 徹・京都大学助手)

富山県教育委員会編

『高樹文庫資料目録』

昭和五二、五三年度

『歴史資料緊急調査報告書』

『高樹文庫』というのは、財団法人高樹会の有となつている図籍・資料をいい、石黒信由(一七六〇—一八三六)以後、歴代石黒家に伝えられてきた旧蔵書・資料類を内容とする。「高樹」の名称は信由の書齋

号「高樹堂」に由来する。

石黒信由は、宝暦一〇年射水郡高木村(現新潟市高木)の豪農の家に生まれ、二三歳で家督を継いだあと、天明四年高木村肝煎となつて以来、新田開発・用水建設・検地測量・地図作成などにすぐれた力量を発揮した農村のリーダーである。

彼は、算学を関孝和の流れを汲む中田高寛に、また天文・暦算を麻田剛立門下の西村多沖に、また測量術を宮井安泰に学ぶなどすぐれた指導者について科学の教養を培った。ことに算学に卓抜な成果をあげ、この時期空前の業績といわれる代表的著作

「算学鉤致」をはじめ数多くの著作がある。また検地・用水・新田・郡村・市街にかかわる地図や海図も数多く残されている。さらに冊子類のなかにも、文化年間の測量野帳などがおびただしく存在する。これらが基礎となりより広域にわたる「加能越三州

図」「三州測量図籍」「加能越三州大路水経」などの地図・図籍類もまた彼のすぐれた成果を伝えるものである。ここに記したものはごくわずかな一端で、その著作はすくぶる多く、彼の多才ぶりをあらわす。

このような学才は、信由以後の子孫にも

すぐれた人物が出て継承され、父祖のコレクションをも保存してきた。

その全貌は

- 一、和算資料(約一、〇〇〇部)
- 二、古文書(約一、五〇〇部)
- 三、古地図(約一、二五〇部)
- 四、国書(約二五〇部)
- 五、漢籍・準漢籍(約二〇〇部)

に器具二〇点がふくまれる。これらの内容について、これまでも田中鉄吉・早苗藤作氏によって和算資料が、また中島正文氏によって古地図が、調査あるいは分類・整理され、部分的に目録がつくられたことがあった。

これら資料の全体は、昭和三四年富山県指定文化財とされ、さらに富山県文化財保護条例にもとづいて、一括して富山県指定有形文化財(書籍)に指定されながら、その膨大な量と内容の難しさのために、なお完全な目録のないままに推移し、以来一刻も早く総括的な資料目録の出現が望まれていた。このたび富山大学文学部の楠瀬勝氏を主編とし、木下良・永田英正・藤森勉・藤本幸夫氏等の富山大学関係者、高瀬保・竹内伸一・保科斉彦・新田二郎氏等富山

県史編纂班の方々、広瀬誠・近岡七四郎・米原寛・関清氏等、富山県立図書館・新湊市文化財審議会・富山県の教育関係者などのメンバーに、県外より和算など科学・技術史関係を担当された藪内清・吉田光邦・吉田柳二氏等の協力者が加わり、各分類毎の解説を付した目録が完成されたのである。周到で、よく整った内容を見ると、限られた期間のなかで、調査員各位がいかに御苦労されたが行間にはしみ出ている。その成果は、当代の定評ある目録と比較しても些も遜色のない出来栄えといひ得よう。関係者の御苦労に心からなる敬意を表するとともに、これが緒口となつて石黒氏歴代の業績が総合的に解明されることを期待したい。近年刊行されたすぐれた目録のひとつといえるであらう。

申込先 富山県新湊市本町二一〇一三
 ○ 新湊市役所 社会教育課
 代金 本代四、五〇〇円+送料(代金は、同目録及び請求書を受け取った後、送金すること)

(B5判 五二二頁 一九七九年三月)
 富山県教育委員会
 (船越昭生 奈良女子大学文学部教授)

R. A. Dodgshon and
 R. A. Butlin (eds.):
 An Historical Geography
 of England and Wales

歴史地理学者は、もはや過去の空間的パターンの再構築にのみ関心を示すのではなく、そのようなパターンを生み出すプロセスに関心をもつべきであるという動きは、一九六〇年代以後、イギリス歴史地理学界において、しだいに大きなものとなつてきた。そして、この考え方にしたがって、過去に関する諸問題も再評価がなされている。こうした成果をイングランドとウェールズの歴史地理としてまとめたのが本書である。イギリス歴史地理学におけるこの変化は、各時代のクロスセクションとそれらの間の変化を共通の視点とする、一九七三年のH. C. Darby (eds.): *A New Historical Geography of England* と本書におけるテーマ別の視点を比べれば、明らかであろう。本文は十四章からなり、一章を(一)内示した一人の執筆者が担当している。なお、前半では一応、時代別に一章をなすが、一五〇〇年以降を対象とし、この本の3分

の2を占める後半はテーマ別の構成をとる。第一章(B. K. Roberts)では先史時代の研究に関して、資料の問題から、年代測定法、文化の連続性の問題がとり上げられ、さらに、遺跡に関する空間分析、仮説検証について展望がなされる。

第二章(T. Hodder)は、晩期鉄器時代社会の空間構造とそれらがローマ時代ブリテン社会に与えた影響、ローマタウンや村落パターン、道路ネットワークなどの分析を試みる。

第三章(G. R. J. Jones)では、ローマ時代とノルマンの征服との間の時代が扱われ、イングランド諸王国の発生、社会組織、農村や都市の変貌・発展などが論じられている。

第四章(R. A. Dodgshon)では、*Domesday Book* の分析から、人口分布や社会類型が描き出され、2つの発展モデルを軸として、社会や町、工業について考察が加えられる。

第五章(R. A. Butlin)には、十四世紀後半から十五世紀にかけての人口や経済、都市や村落また商工業などの分析から、イングランド東部・東南部の発展を描き出す。